
視力

都心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

視力

【コード】

N26130

【作者名】

都心

【あらすじ】

そう、僕は泣かなかった。

小さい頃から視力だけは、良くて。

見えない物まで見えるかと思うくらいだった。

*

こんな田舎で、僕の父親が生まれ育ったなんて信じられなかった。

建物よりも木々の方が多く目に入り、色の濃い虫が飛び交っている。

湿度が低く、都会より過ごしやすい点は気に入った。

家からすぐのところから湾が望め、子どもたちが元気に走り回っているような、どこにでもあるような田舎の情景だった。

*

母親が仕事でイタリアの方まで飛んでいってしまい、それに対抗するかのように一週間ほど帰郷すると父は言い出した。

止める理由もない。

夏休みの真っ只中で暇を持て余していたということもあって、僕と父は値の上がったガソリンをいっぱい詰めた車で、この辺鄙な街までやってきた。

父が言うには、昔からの言い伝えが沢山あって面白いところ。らしい。

興味は湧かなかった。

*

着いて一目にして、暇になってしまった。

田舎まで来てゲームは無いだろう。と思い、携帯ゲーム機すら持ってきていなかった。

娯楽らしき存在が皆無のこの街に、僕の脳に刺激をくれるものは見当たらない。

「海にも行ってみたらどうだ」

また父の提案に乗るのか。と少し愁いたが、他にすることもない。

父の父。つまり祖父も、海がいい。と太鼓判を押した。

昼間からビールを開けて頬を赤くしている。絵に描いたような好々爺だ。

彼等に背中を押されて、僕は海に行くことにした。

海はとても静かだった。

来る途中に学校があった。野球部が小気味いい音を弾いて練習している。

凧いでいた。

鳥達はわずかな風を体に染み込ませて、無意味なくらい自然に飛び回っている。

僕はコンクリートに腰を落ち着かせて、潮に髪を任せていた。

(ん?)

テトラポッドの上に誰か座っている。

透き通るような白いブラウス。

麦わら帽子。

どっちら女性のようにだ。

近づいてみる。

普段なら絶対にこういうことはしない。自信がある。

何が僕にそうさせたのか、僕は彼女に話しかけた。

「この街の方ですか？」

彼女は振り返った。

短い黒髪を、前でパツツと切っている。

少しだけ瞳が大きい。

「その高校の」

彼女が指差した先には、潮風のせいで色の落ちた校舎があった。

さっき僕が前を通ってきた学校だ。

「僕は、都会の方の高校で。一年です」

「じゃあ、私の方が先輩。二年生」

彼女の話は、面白かった。

この辺りを飛んでいる海鳥のことと、まったく似つかわしくないがフナ虫にも詳しくかった。

首都の方住んでるの？ とか、あつちは蒸し暑いんでしょ？ とか、そういった質問をぶつけてきたので、一通り返事もしていた。

大げさなくらいクルクルと表情を変えてリアクションをとってくれるので、話しやすかった。

僕は田舎にいる間、殆ど海に行った。

*

「海を見てるとき、落ち着くよね」

「そう思う？ 私も」

四日目も、彼女はそこにいた。

そのときは、大学生らしき男子が数人、サーフボードで、さほど大きくない波に乗っかっていた。

潮のきつい匂いならとっくに慣れた。

「私にはね、待ってる人がいるの」

彼女はたまにこうして唐突に話し始める。

「へえ」

「……あんまり興味ないでしょ？」

「全くないわけじゃないよ」

鷗が鳴いた。

気がした。

*

テトラポッドに当たる波の音が好きになった五日目、父にその話をした。

「ああ、俺もなあ、その出なんだよ。確かにそんな感じの髪はやつがいたかなあ」

「え？ 父さん今、47だろ？」

「ん？ ああ。昔からそんな髪型のヤツがいたってことだよ」
酒臭い匂いに混じって、蚊が飛んできた。

祖母がうどんを持ってきたころ、月が雲から顔を出した。

僕は父の言葉を数回心の中で反芻した後、うどんを啜った。

蒸し暑く、月が綺麗な夜だった。

次の日も彼女はいつもの場所にいた。

「暇なの？」

「それはこっちの台詞だよ」

笑顔が似合う人だ。と改めて思った。

「明日、帰るんだよ」

「あら。じゃあ、ここも静かになるね」

「言ってくれるじゃん」

本心じゃないのはわかったし、正直言つとまだ帰りたくなかった。

それに、一つ気づいてしまった。

*

最終日、僕は何年振りかに駄々をこねた。

「すぐ終わるからさ、海、海」

「そんなに気に入ったのか……じゃあ、早く行ってこいよ」

荷物を詰め込みながら、父は許可を出した。

彼の煙草の灰が落ちるのと同じくらいに、僕は海に向かって駆け出した。

「また来たんだ」

「誰のこと待ってるって言うってたけ？」

「まだ内緒」

彼女は満面の笑顔だった。いつも通りのブラウスに麦わら帽子。

その笑顔は良いけど、僕には聞きたい……いや、聞いておくべきことがあった。

「死んでも待っていたい人って、誰のことかなって」

彼女は少しだけ驚いて、またすぐに笑った。

「バレちゃしょうがないよね」

「父さんの卒業アルバムに写ってちゃあ、ね」

鴉が鳴いた。

気がした。

「その高校で、レギュラーやってたの。もう何十年も前だけどね」

僕は来る日に見た野球部の練習を思い出した。

バットがボールを芯でとらえる音が頭の中で再生される。

「ここだと聞こえやすいんだね」

「彼の後輩達も上手くて。良い音がするの」

「今は？」

「知るわけないじゃん」

彼女は海の方を見た。

頬が水滴を滑らせる。

「ここで、この世界からさよならしてしまったのかもしれないと。」

そう思えて仕方が無かった。

「もう帰らないと」

「そう」

「ありがとう」

「こちらこそ」

鴉は鳴かなかった。

少し歩いて、振り返ったとき、もう彼女はそこには居なかった。

小さい頃から視力だけは、良くて。

見えない物まで見えるかと思うくらいだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2613o/>

視力

2010年10月11日17時55分発行